鈴木 61メートル04 V

帯農3年　男子やり投げ

大逆転にどよめき

【男子やり投げ決勝】61メートル04を投げて他を圧倒して優勝した鈴木陸人（帯農）

全道高体連　陸上（17日・室蘭市入江運動公園陸上競技場）

第3日は男女9種目の決勝を行った。男子やり投げ決勝で鈴木陸人（帯農3年）が5投目に自身初となる60メートル超えの61メートル04を投げ、逆転で優勝をさらった。女子800メートルは十勝勢で唯一決勝に駒を進めた伊藤瑠里（帯南商同）が5位となり、準優勝した400メートルと合わせて2種目での全国高校総体（インターハイ）出場を決めた。男子走り高跳びでは佐々木啓吾（広尾同）、泉陽七斗（白樺学園2年）、三好慶悟（帯柏葉1年）の3人が決勝に進み、佐々木が1メートル92をクリアして6位に食い込み、全国切符を手にした。泉は惜しくも7位、三好は記録を残すことができなかった。

（大野篤志、小山田竜士）

（記録は9面に掲載）

鈴木陸人が終盤の緊迫した場面でどでかい投てきをやってのけた。鈴木の手から5回目に放たれたやりは、会場も期待でどよめくほど大きな放物線を描いて60メートルラインをさらに超える61メートル04に到達。3位からトップに躍り出た。

新型コロナウイルスに対する緊急事態宣言によって練習時間や場所が限られ、やりを遠くに投げることができないまま大会を迎えた。予選で1回目に通過記録50メートルを超える54メートル09を出し、感覚がよみがえった。しかし、決勝に入るとライバルの橋堀佑輝（札幌新川3年）が1回目に57メートル17、2回目は伏見洋飛（富良野緑峰3年）が58メートル75と先に記録を伸ばすのを見せられた。鈴木の1回目は53メートル19で、2回目に57メートル24に伸ばしたが、追う立場は変わらない。3回目は56メートル26で、2位の状況でトップ8に進んだ。

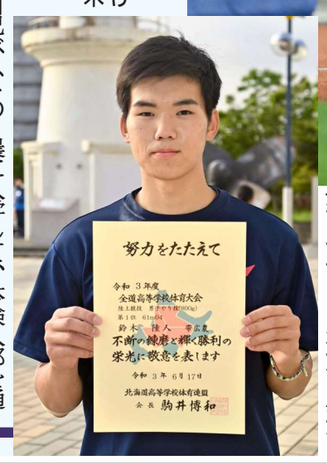
練習に制限もメンタル改善

昨年9月の道新人大会で鈴木は6位に終わっている。橋堀は3位だったが、伏見は入賞外。成長していることに「富良野の選手は怖かった」と警戒した。

4回目で橋堀が59メートル20と逆転。鈴木は54メートル86だったが、それまで使用していた自分のやりではなく大会が用意したやりを使用した。「1回投げてみたかった」とまだまだ気持ちに余裕があった。再び自分のやりを握った5回目に支部予選で出した自己ベストの59メートル13を2メートル近く超える61メートル04を記録。「助走が走れていて、クロスからのブロックがうまくいった」という技術面以上に、「頭の中は楽しいというイメージだけで、笑顔をしてから投げる」というメンタルの改善が結果を引き出した。6回目もこの日の2番目となる59メートル28。完勝だった。

芽室町上美生小時代はバドミントン、上美生中ではソフトテニスをやっていたが、テレビや動画でやり投げの選手の姿を見て憧れてもいた。帯農に入学して、体験入部を通して陸上部に決めた。当時の西山修一監督（現幕別清陵監督）にやり投げをやりたいと申し出たが、「帯農が投てきの強豪校とは知らなかった」という。

身長181センチと体格に恵まれ、ウエートトレーニングで肉体も強化。スローイングはバドミントンの経験が生かされている。「自分は練習よりも本番に強いタイプ」と笑い、「インターハイでも体のしなりを使っては65メートルを投げたい」と目を輝かせた。



男子やり投げを制した鈴木陸人

伊藤

帯南商　800も全国へ　5位入賞

【女子800メートル決勝】残り1周、後方から追い上げる伊藤瑠里（左、帯南商）

伊藤瑠里が冷静さと我慢強さで2枚目のインターハイ切符を手に入れた。

伊藤にとっては準優勝を遂げた400メートルよりも800メートルがメインで、どうしても勝ちたい種目。しかし、大会初日に400メートルの予選、準決勝、決勝の3本を走り、2日目は800メートル予選、この日は同準決勝と決勝、さらに1600メートルリレー予選を控えていた。

決勝が始まると、このレースを制した上西彩未（立命館慶祥2年）が先頭に立ってぐいぐいとペースを上げた。負けず嫌いの伊藤だが、闘争心を抑え込んで最後尾からペースを確認しながら付いていった。「今、抜きに出てもスタミナが持たない。タイムや勝負よりも順位（6位以内）を狙ってインターハイに行く」と気持ちを切り替え、我慢。残り400メートルを過ぎて上西がペースを上げ、集団が立てにばらけてきたところで伊藤も勝負に出た。バックストレートでペースダウンした7位の選手を抜くと、残り200メートル過ぎには4位にまで浮上。ゴール間際に5位の選手に抜かれて順位は一つ落ちたが、念願の800メートルでの全国行きを決めた。

「最後はスタミナもカツカツ。でも気合で何とかしました」と笑う。タイムは自己ベストの2分19秒04だった。

伊藤はこれだけで満足していない。「マイル（1600メートルリレー）も合わせた3種目で全国に行きたいんです。全力で走りますよ」と気持ちを奮い立たせ、この日最終種目の1600メートルリレーの予選でもしっかりとした走りを見せ、組1位での準決勝進出に貢献した。

佐々木

広尾　意地の6位

走り高跳び

男子走り高跳びで佐々木啓吾がインターハイ出場を決め、前日の400メートルリレー予選での失格の悔しさを晴らした。

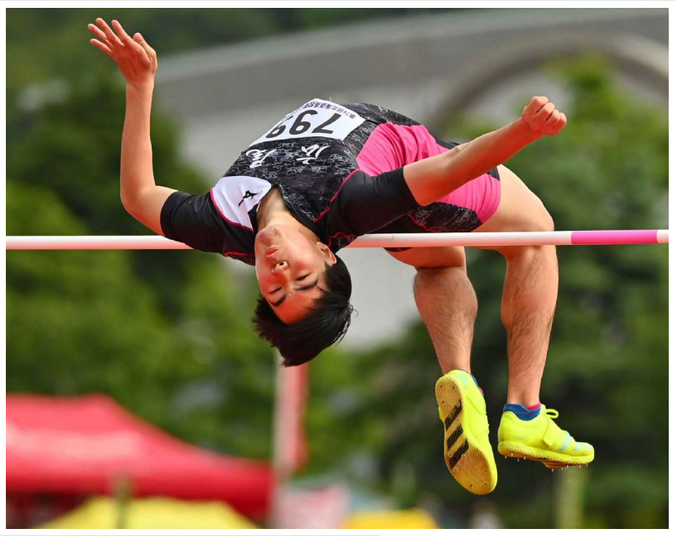
1カ月前の十勝支部予選で腰に痛みを抱えたが、治療などで気にならない程度まで回復。緊急事態宣言で練習は2週間できなかったが、残り1週間で感覚を戻した。この日は「決勝の練習跳躍でいい状態の感覚に戻れた」と手応えを感じていた。

1メートル89をクリアした選手は7人。続く1メートル92で佐々木は2回失敗。崖っぷちに追い込まれた状況で、さらに佐々木の3回目の跳躍が場内アナウンスで紹介され、会場全体から注目される中、しっかりとクリアして見せた。

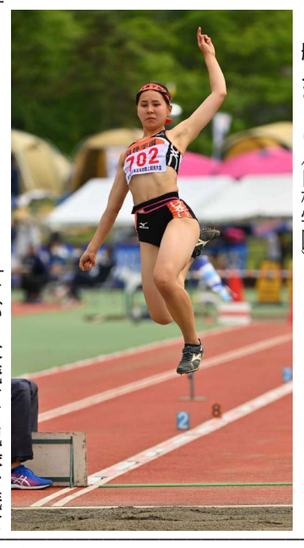
アンカーとして出場した前日の400メートルリレーで3走から4走へのバトンの受け渡しで失敗。2020年のルール改正によってバトンの受け渡しが完了していない状況で落とした場合は、渡す側の前走者が拾わなければならないが、転がるバトンを佐々木が拾ってしまったために失格となった。支部予選では大会新を出し、全国も十分に狙えていただけにショックが大きかった。

それでも気持ちを切り替えることのできる強さがあった。「高跳びで行くしかないと吹っ切れた」と集中した。

自己ベストの1メートル94を超える1メートル95への挑戦は「インターハイが決まって力が抜けてしまった」と失敗した。全国は2メートルを超えなければいい勝負ができない。「今回は助走がはまった感がある。この感覚を忘れず、さらに助走を磨けば2メートルは跳べる」と自分を奮い立たせていた。



【男子走り高跳び決勝】1メートル92を跳んで6位に入賞した佐々木啓吾（広尾）



【女子走り幅跳び決勝】5メートル23を跳び9位だった船見さくら（白樺学園）

痛恨のファウル「合わせられず」

走り幅跳び・船見

○…「助走のスピードはあったが、跳躍に合わせられなかった」。女子走り幅跳びで十勝勢で唯一決勝に進出しながらも、トップ8入りを逃した船見さくら（白樺学園2年）は肩を落とした。

予選は通過記録の5メートル10に対し、1回目で5メートル16（向かい風0・3メートル）を出してクリア。上位12人の決勝に進んだが、雰囲気にのまれてしまった。1回目は踏み切り板を大きくはみ出してファウルになったが、「感覚的にはいいかんじで跳べていた」と手応えをつかんだ。しかし、2回目も再びファウル。「2本目のファウルが」と振り返るように、周囲の選手がしっかりと記録を出している中で自分だけが2本続けて記録を残せていないことに焦りが生じた。3本目は5メートル23（追い風0・3メートル）だったが、トップ8には届かなかった。

船見は「どんな場面でも安定して跳べるようにしたい」と課題を挙げ、全道新人大会ではしっかりと記録も順位も残すつもりだ。

「持久力足りず」2枚目切符逃す

男子5000・菅原

○…男子1500メートルを制した菅原広希（札幌日大高3年―鹿追中出）が5000メートルでも予選を通過し、この日の決勝に出場。結果は9位に終わり、2枚目の全国切符を逃して「きつくなったところで粘れる持久力が足りない」と悔しさをにじませた。

レースはケニア人留学生のキンヤンジュイ・パトリック（札幌山の手3年）と森春樹（道栄同）がハイペースで抜け出して一騎打ちの展開。大きく引き離された第2集団は、全国切符の残り4枠をめぐる順位争いとなった。

菅原は中盤まで第2集団の先頭を走っていたが、3000メートル近くになると集団の中にのみ込まれた。一時は第2集団の後方にまで下がったが、最後は盛り返す意地も見せた。

「苦手の長距離を克服し、5000メートルも走れるようになりたい」と挑んだが、自分の課題を改めて思い知らされた。「インターハイは決勝に残り、入賞します」と1500メートルに集中する。

【男子5000メートル決勝】レース前半、第2集団を先頭で引っ張る菅原広希（中央のゼッケン2番、札幌日大高）

女子複　上野・佐藤　帯大谷　藤野屋・濱下　8強

バドミントン

気持ち切り替え　積極的に前へ

上野・佐藤組

○…上野稜佳・佐藤柚夕組（帯大谷3年）は、敗れた準々決勝も全力でプレーした。

速い展開を得意とする2人にとって「テンポが遅い相手。流れを持っていかれた」（佐藤）。普段は上野から声をかけて展開を引っ張っていくが、第1ゲームは「声を出せなかった。迷惑をかけた」（上野）。

第2ゲームで2人とも一本でも取るという気持ちに入れ替え、動きを取り戻した上野は積極的に打ち込み、相手の体勢を崩しつつ、前に詰めた佐藤が好機を狙ってスマッシュを決めた。

2人のショートサーブも光った。「バックの感覚が違う」と、佐藤は上野を評する。ネットに沿って球を落とす上野の技術に追いつけ追い越せと、重ね続けた佐藤の努力も結実した。

「（旭川）実業の独占をひっくり返してほしい」。悔しさをにじませつつ、上野は後輩に期待した。

【女子個人戦北北海道・準々決勝】連係良く攻撃を仕掛ける帯大谷の（左から）上野稜佳と佐藤柚夕のペア

後輩鼓舞し全力「信じて越えた」

藤野屋主将

○…帯大谷の藤野屋香凜主将（3年）は、2年の濱下亜美と組み、準々決勝で力を出し切った。膝のけがに苦しむ中、つらい経験が精神面を強くした。

渡島管内森町出身。中学時代の恩師と、入江優喜監督のつながりから帯大谷に進学。3年間を競技に懸けてきた。

地元を離れて、苦しいこともたくさんあったが、家族や先生、周囲に支えられた。その思いを結果で返そうと全力で戦った。

点差が開いていく中でも「まだいける」と、濱下を鼓舞し続けた。「周りが見えている。どんなことも諦めない」と濱下は信頼を寄せる。第2ゲームの7―17から、滑り込んでシャトルに粘る主将の闘志は、後輩の胸に刻まれた。

結果に悔しさが残る半面、「やってきたことを信じた。よく乗り越えた」。最後は自分を褒めた。貫いた笑顔の陰で涙した全国への思いは、後輩が実現する。

【女子個人戦北北海道・準々決勝】粘りのプレーを見せる帯大谷の（手前から）藤野屋香凜主将と濱下亜美ペア

決め急いでいた

女子個人戦ダブルスで2回戦敗退の帯南商の江口遥・柏村茉那組（3年）の話

勝つつもりだったが、押し切られ持ち味が出せなかった。最後まで集中して取り組む気持ちは今後に生かす。後輩はさらなる高みを目指してほしい（江口）。

最後は決め急いでしまった。進学後の勉強でも、一日一日を大切にすることを忘れない。新チームは、試合を通して学び続け活躍してほしい（柏村）。